論　文

保育内容「言葉」に関する研究の動向と特質

The Research Trends of “Language” as One of the Five Contents of Child Care and Education

南　陽　慶　子
NANYO, Yoshiko

Abstract

The purpose of this study is to review the current researches on “Language” as one of the five contents of child care and education guidelines, and examine the characteristics of the studies. The 62 articles were analyzed with a quantitative and qualitative approach. The results are as follows:

1) The studies on “Language” as one of the five contents have increased since 2005 and 70% of the studies correspond to the theoretical studies or the practical studies.
2) Among the practical studies, 90% of the researches are on the lectures targeted at teachers’ training school students, while the researches on the practical field such as childcare centers are very few.
3) Focusing the subject, the research on picture book and picture-card show account 23% which was the most, and most of them are related to the lectures in teachers’ training school.
4) It is pointed out that the process of the children’s language development and the student teachers’ development on “Language” as one of the five contents has been confused in this field.

キーワード：保育内容、言葉、領域、研究動向

Ⅰ．問題と目的

1989（平成元）年、幼稚園教育要領が大幅に改訂され、保育内容は従来の「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の6領域から、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域で示されることになった。その翌年の1990年に改訂された保育所保育指針においても、保育内容は同様の5領域となった。この大幅改訂の背景には、1956（昭和31）年に刊行され1964（昭和39）年の改訂を経て続いていた従来の幼稚園教育要領の6領域が、発達の目標と解釈され、小学校教育における教科との混同が生じ、保育者主導型の保育内容に陥ったことが挙げられる。そのため、1989年版の幼稚園教育要領では、幼稚園生活の全体を通してねらいと内容が総合的に達成されることが目指され、子どもの発達をとらえる視点または窓として5つの領域が編成された。このような考え方は、その後の1998年および2008年の幼稚園教育要領の改訂や保育所保育指針にも引き継がれ、現在に至っている。

こうした1989年の幼稚園教育要領の改訂は、保育現場にかなりの困難を生じさせた。とりわけ、「保育内容」や「領域」の考え方が大きく見直されたことから、「保育内容」をどのように理解し、保育実践にどのように位置づけられるのかということと、保育者の指導性について、かなりの困難と混乱が生じたという[1)]。それでも、平成期の幼稚園教育要領の改訂により、子どもの自発性を尊重しかつ環境による教育を行うために、子ども一人ひとりの発達を論じる言説の創出、省察と評価の一体化、「見守る」保育方法などの実践的方略が保育現場において生成されてきたことが明らかになっている[2)]。

その一方、汐見（2008）[3)] は、幼児教育・保育の90年代の課題として、「保育内容論やカリキュラム論の研究がおろそかになっていた」と指摘している。保育内容をめぐるこれまでの経緯と、研究上の課題を鑑みても、「保育内容」について、5つの各領域から、そして5領域全体から、より良い保育実践に寄与する研究が求められていると言えよう。

5つのいずれの領域も等しく重要であることについて

こども教育宝仙大学　講師

はここで改めて触れるまでもないが、本稿では、領域「言葉」に着目したい。言葉は、子どもの全体的な発達の中から生み出されてくるものであり、その言葉はまた、子どもの発達のあらゆる側面に強い影響力をもって浸透していくものであるといわれている[4)]。特に乳幼児期は、言葉の力が著しく育つ時期であることから、子どもの言葉が豊かに育つための保育環境、保育実践に寄与する研究が不可欠である。保育内容に関する先行研究では、いずれかの領域おいて個別のテーマを設定して考察・検討を進めているものと、ある領域に関する研究の動向を明らかにしているものとに大別できる。領域「言葉」に関する研究では、管見の限り個別のテーマ設定によるものがあるのみで、全体的な研究の動向やその特質は明らかになっていない。そのため、ある特定の視点からの研究は充実しているが、全く研究がなされていない視点が存在するのではないかと考えられる。

そこで本研究では、保育内容の領域「言葉」に関する先行研究の動向を概観し、その特徴的な研究の知見を整理することを通して、その特質と課題について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方法

本研究では、量的・質的の両アプローチを用いる。まず量的なデータから全体的な傾向を検討する。次に、個別の研究内容を整理することを通して、これまでの研究成果について分析する。最後に、分析を通して示唆される研究の方向性から、今後の研究課題を見出すこととする。これにより、保育内容「言葉」に関する研究の動向とその特質を明らかにでき、さらには今後の研究課題についても明らかにできると考える。

先行研究の抽出にあたっては、CiNii（国立情報学研究所　論文情報ナビゲータ）で、「保育内容」「言葉」の2語をキーワードとして論文の検索を行った。その結果、85件の論文が抽出された（2017年7月10日現在）。また、先行研究では、「保育内容『言葉』」と同じ意味合いとして「領域『言葉』」などと記す研究も散見され、現状ではそれらの用語の使い分けに統一がなされていない。そこで、「保育」「領域」「言葉」の3語、さらに「幼稚園」「領域」「言葉」の3語のキーワードでも検索を行い、それぞれ42件と28件の論文が抽出された。

以上、合計155件のうち、重複する論文と学会発表要旨および一般雑誌を除き、保育内容「言葉」に関する研究と判断できる62件の論文を分析の対象とした。抽出された62論文は、すべて1991年以降のものであった。論文タイトルに、「保育内容『言葉』」や「領域『言葉』」といった語句が含まれているものの、論文の本文中に、保育内容「言葉」に関連する言及がない研究については、対象から除外した。

なお、本稿では、幼稚園教育要領および保育所保育指針における保育内容の5領域の一つである領域「言葉」を表す語として、「保育内容『言葉』」を用いる。

Ⅲ．結果

1．保育内容「言葉」に関する研究の全体的な動向

1）研究の種類別にみる研究動向

まず、先述の方法で抽出した62件の先行研究を、「理論研究」、「実践研究」、「調査研究」、「事例研究」、「歴史研究」、「その他」の6つの種類に分類し、分析した。分類にあたっては、研究方法に重点を置いた。各種類の詳細は、表1の通りである。

研究の種類別に論文数をカウントした結果は以下の通りである。また、この比率を表したのが、次の図1である。

・理論研究：22件
・実践研究：21件
・調査研究：9件
・事例研究：6件
・歴史研究：2件
・その他　：2件

表1：保育内容「言葉」に関する研究種類の分類表

種類名	研究内容の例
理論研究	幼稚園教育要領・保育所保育指針の文言や文献などから、保育内容「言葉」に関する内容やその意義について考察する研究
実践研究	保育現場における保育者や研究者による保育実践、保育者養成校における授業実践を開発および検討する研究
調査研究	保育者や保育者養成校の学生を対象にしたアンケート調査などのデータを基にして、何らかの実態を明らかにしようとする研究
事例研究	保育現場での保育者と子どもの関わりや、子どもの実際の姿など、具体的な事例を基にした研究
歴史研究	保育内容「言葉」に関する歴史的な背景や言説を検証する研究
その他	上記のいずれにも当てはまらない研究

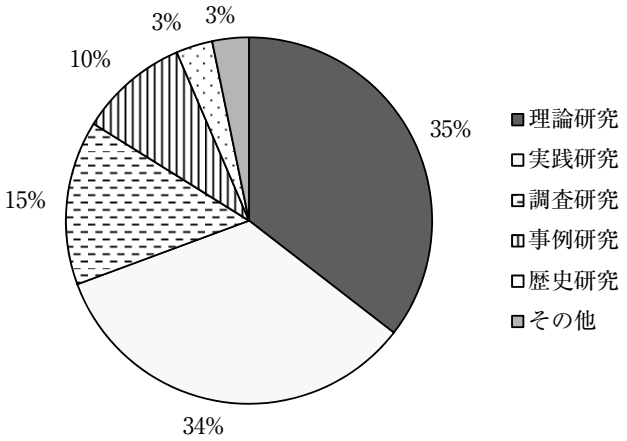

図１：保育内容「言葉」に関する研究の種類（割合）

この図１から、「理論研究」が35％（22件）と最も多く、２番目に多いのが「実践研究」で34％（21件）を占めていることがわかる。３番目に多いのは、「調査研究」で15％（９件）を占める。「事例研究」は10％（６件）と決して多いとは言えない結果であり、「歴史研究」は3％（２件）と極端に少ない。「理論研究」と「実践研究」で全体の70％近い研究がなされており、これらの研究が主流を成していることがわかる。

2）経時的な変化にみる研究の動向

続いて、保育内容「言葉」に関する研究動向の経時的な変化を見ていく。抽出された論文のうち最も発表年の古い1991年から最新の2017年までの27年間を、２年ごとの14期に区切り、62件の論文がどの時期に発表されているか分類したのが、表２である。さらに、幼稚園教育要領の改訂のタイミング（1989年、1998年、2008年）ごとに区切ってグラフ化したものが、図２である。

時系列で見てみると、保育内容「言葉」に関する研究の動向が大きく変化していることがわかる。表２のとおり、1990年代は、全体でわずか３件の発表と非常に少なく、汐見（2008）[5]の、幼児教育・保育の90年代の課題として保育内容論の研究がおろそかになっていたという指摘と一致する。そして、2004年までは、年に１件の発表もしくは発表なしという状況が続いている。

その後、2005年から徐々に増え始め、年に複数件の論

表２：保育内容「言葉」に関する研究の種類（時系列）

年	理論研究	実践研究	調査研究	事例研究	歴史研究	そ の 他	計
2016-2017	2	4	1	1	0	0	8
2014-2015	6	5	2	0	1	0	14
2012-2013	0	3	3	1	0	1	8
2010-2011	3	3	3	1	1	1	12
2008-2009	4	0	0	2	0	0	6
2006-2007	4	3	0	0	0	0	7
2004-2005	2	1	0	0	0	0	3
2002-2003	0	1	0	0	0	0	1
2000-2001	0	0	0	0	0	0	0
1998-1999	1	0	0	0	0	0	1
1996-1997	0	1	0	0	0	0	1
1994-1995	0	0	0	0	0	0	0
1992-1993	0	0	0	0	0	0	0
1990-1991	0	0	0	1	0	0	1
計	22	21	9	6	2	2	62

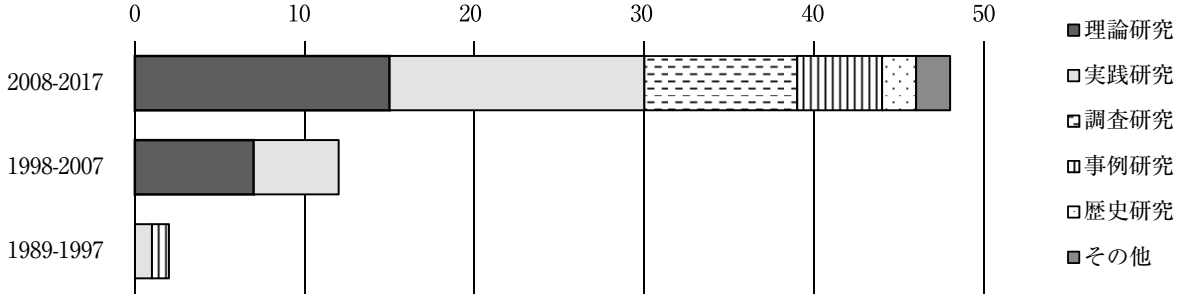

図２：保育内容「言葉」に関する研究の種類（要領改訂ごとの時系列）

文が発表されるようになった（2009年は1件のみ）。現時点では、2017年に発表される論文がすべて出揃っておらず、今年の発表件数が今後さらに伸びるであろうことを鑑みても、保育内容「言葉」に関する研究は、2005年以降増加傾向にあると言える。

さらに、図2からは、幼稚園教育要領の改訂のタイミングごとに、保育内容「言葉」に関する研究の件数が大きく増加していることがわかる。1989年（平成元年）版の期間は2件、1998年（平成10年）版の期間は12件、そして、現行の2008年（平成20年）版の期間では48件である。さらに、研究の種類別に見てみると、実践研究の増加の割合が大きい。実践研究は、1998年版の期間では5件であった発表件数が、2008年版以降現在までに15件へと3倍に急増している。この結果は、理論研究が7件から15件へと約2倍の増加であることと比べても、近年の保育内容「言葉」に関する研究動向の特徴として、実践研究の顕著な増加が挙げられる。また、調査研究は、2010年に初めて登場しており、全9件の研究はすべて現行の2008年版幼稚園教育要領の期間に発表されていることがわかる。

3)「対象」からみた研究の全体的傾向

続いて、先行研究が何を対象として研究を行ったのかに着目したところ、その対象は、「文献」、「保育者養成校の学生（以下、保育学生）」、「子ども」、「保育者」、「子どもと保育者」、「その他」の6つに分類された。その結果は以下の通りである。

・文献：21件
・保育学生：21件
・子ども：6件
・保育者：5件
・子どもと保育者：2件
・その他：7件

これらの比率を表したのが、次の図3である。この図3から、「文献」と「保育学生」を対象とした研究がそれぞれ34%（21件）と同率で最も多いことがわかる。「文献」と「保育学生」を対象とした研究で全体の約7割を占めている。そして、「子ども」を対象とした研究が10%（6件）、「保育者」が8%（5件）、「子どもと保育者」が3%（2件）という結果からは、保育現場をフィールドとした研究が少ない現状がわかる。

さらに、「理論研究」、「実践研究」、「調査研究」、「事例研究」、「歴史研究」、「その他」の研究種類別に研究対象の内訳を示したのが表3である。この結果から、文献を対象とした理論研究と保育学生を対象とした実践研究が同率で19件と顕著に多いことがわかる。そして、特筆すべきは、実践研究のうち、実に9割（21件中19件）の研究が保育学生を対象としているということである。すなわち、この結果からは、保育内容「言葉」に関する実践研究は、保育者養成校における保育学生を対象とした授業実践の開発および検討を中心として進められてきていることがわかる。これは、保育内容「言葉」に関するすべての研究の約30%を占めるものであり、この研究領域において、養成校の授業実践研究が盛んに行われている現状を示している。その一方、保育現場における保育実践を扱う研究が、実践研究のわずか1割（21件中2件）で、すべての研究のうち約3%を占めるのみという結果からは、この研究領域において保育実践を扱う研究が極

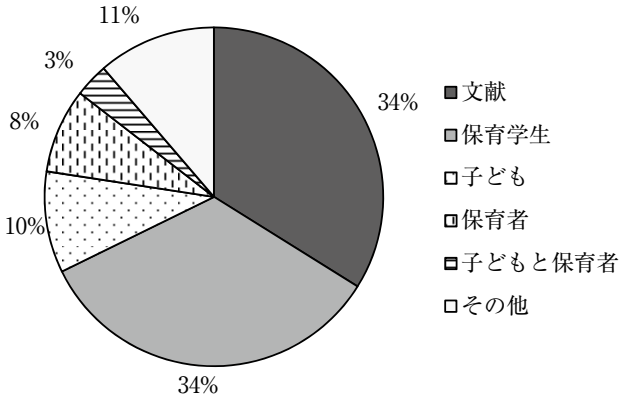

図3：保育内容「言葉」に関する研究の対象（割合）

表3：保育内容「言葉」に関する研究種類別にみた研究の対象（内訳）

	理論研究	実践研究	調査研究	事例研究	歴史研究	そ の 他	計
文　　献	19	0	0	0	1	1	21
保 育 学 生	0	19	2	0	0	0	21
子　ど　も	1	2	0	3	0	0	6
保　育　者	1	0	4	0	0	0	5
子どもと保育者	0	0	0	2	0	0	2
そ　の　他	1	0	3	1	0	2	7

めて少ないことがわかる。

さらに、保育学生を対象とした研究19件のうち15件の研究が2011年以降に発表されており、保育者養成における授業実践研究が2011年以降急増していることがわかる。こうした結果は、渡辺（2017）の研究ですでに指摘されているように、2010年に発表された「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」における保育内容科目の指導に関する検討と、その後の改正の影響を受けたものであると考えられる[6]。

4）テーマからみる研究の傾向

次に、上記の全62件の研究の内容を分析し、各論文で焦点が当てられているテーマを抽出した上でそれらの共通性を見出した。その結果、全62件の研究のテーマは、「『言葉』の考察」、「領域間連携」、「保幼小接続」、「言葉の発達」、「子ども理解」、「保育者の関わり」、「絵本・紙芝居」、「児童文化財」、「その他」の9項目に分類された。論文によっては、複数のテーマに渡って考察が行われているものもあるが、便宜上、最も比重が置かれている項目に分類した。各項目の詳細については、表4の通りである。

そして、これらの研究テーマによる分類を、先述した研究種類との関連と共に示したものが、表5である。表5の結果から、保育内容「言葉」に関する研究では、「絵本・紙芝居」に焦点をあてた研究が14件（全62件中）、全体の約23％と最も多くを占めていることがわかる。次に多いのは、「『言葉』の考察」の9件で全体の約14％である。そして、「領域間連携」が8件で全体の約13％と3番目に多い。絵本・紙芝居については、本来的には児童文化財の中に包摂されるものであるが、絵本のみ、もしくは絵本と紙芝居のみに焦点化した研究が多く見られたため、児童文化財とは別に項目を立てることとした。な

表4：保育内容「言葉」に関する研究のテーマの分類表

項目名	研究のテーマ
「言葉」の考察	幼稚園教育要領・保育所保育指針における保育内容「言葉」の内容に関する考察ついて
領域間連携	保育内容の他領域（健康・人間関係・環境・表現）との連携や関連性について
保幼小接続	保育所・幼稚園・小学校における「言葉」に関する学びの連続性について
言葉の発達	子どもの言葉の発達について
子ども理解	言葉との関連の中で子どもの内面の理解や子ども理解のための方法について
保育者の関わり	子どもの言葉を育む保育者の援助や意識、保育方法などについて
絵本・紙芝居	「言葉」と絵本の関係、絵本・紙芝居の読み聞かせや活用方法などについて
児童文化財	絵本だけでなく、素話やペープサート、劇遊びなども含めた児童文化財の活用や児童文化財の歴史について
その他	上記に当てはまらないもの（養成校のシラバスの報告、保育学生の言語表現能力など）

表5：保育内容「言葉」に関する研究のテーマ別分類

	理論研究	実践研究	調査研究	事例研究	歴史研究	その他	計
「言葉」の考察	9	0	0	0	0	0	9
領域間連携	2	4	0	1	0	1	8
保幼小接続	5	1	0	0	0	0	6
言葉の発達	1	0	0	0	0	0	1
子ども理解	1	1	0	2	0	0	4
保育者の関わり	0	0	3	2	0	0	5
絵本・紙芝居	2	10	2	0	0	0	14
児童文化財	2	1	0	1	2	0	6
その他	0	4	4	0	0	1	9
計	22	21	9	6	2	2	62

お、「絵本・紙芝居」と「児童文化財」をまとめて考えるならば、合わせて20件となり全体の約32％を占めることになる。

以上の結果から、保育内容「言葉」に関する研究では、保育者養成校における絵本・紙芝居を題材とした授業実践の開発及び検討を行う研究と、文献から保育内容「言葉」に関する理論的な考察を行う研究が最も盛んであるということがわかる。この結果は、保育内容「言葉」に関する研究が、幼稚園教育要領・保育所保育指針に依拠し、さらには保育者養成校における授業科目とのつながりが強いことを示している。その一方、保育現場をフィールドとした子どもの実際の姿に基づく研究が少ないことも明らかとなった。

ここまで、保育内容「言葉」に関する研究の全体的な動向について概観してきた。次章では、これまで比較的活発に研究が行われてきたテーマにおける主要な研究を取り上げ、その内容について整理する。

2. 保育内容「言葉」に関する主な研究の概要

本章では、これまでの結果から明らかとなった先行研究の全体的な動向を踏まえて、多くの割合を占めていた文献を対象とする理論研究と保育学生を対象とする実践研究に主に焦点を当て、個々の研究の内容を整理する（表3参照）。その際、先行研究で盛んに扱われてきたテーマを中心として主だった研究を取り上げる（表5参照）。

なお、以下で個別の論文を取り上げる際、保育内容「言葉」およびそれに類する用語は、論者の趣旨を伝えるため、あえて統一せずに原文のまま使用する。

1）保育内容「言葉」の内容に関する理論研究

①　領域「言葉」の変遷と指導の方向性

生野（2010）[7]は、2008年に幼稚園教育要領と保育所保育指針が改訂されたことを受けて、教員、保育士に求められる資質能力の育成を志向し、領域「言葉」の内容や指導の方向性について検討している。はじめに、領域「言葉」の変遷について整理し、平成元年の幼稚園教育要領の改訂以降、領域「言葉」では、言葉の形式面の指導よりも、子どもが日常生活の中で自分の思いや考えを言葉で伝える姿を充実していく方向を強調、つまり、言葉を使う生活の充実化を強調するようになった、と論じている。そして、現行の幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「言葉」における具体的な内容と、生活の中で子どもの言葉を育てるための活動を結び付けて論を展開している。その上で、あいさつ、応答、会話、発表、話し合い、質問、報告、劇化などを挙げて、このような活動形態を子どもの生活に入れていく保育が重要視されると述べている。

②　「領域」と「教科」の解釈の齟齬

福島（2016）[8]は、幼児教育の「領域」と小学校教育の「教科」の解釈の齟齬の原因が何であるかを探るために、その手がかりの一つとして、デューイの教育思想を概観し、領域「言葉」について考察している。その結果、領域「言葉」の特色として、経験と言葉との結びつきに関する記述と、人とのかかわりが基盤となっている記述がとても多いことを指摘し、デューイの鍵概念である「経験」との共通性に言及する。このことから、現行の幼児教育のあり方は、領域「言葉」の観点の限りにおいては経験重視のものであり、「領域」の独自性は保持されているという。しかし、幼稚園教育要領の改訂から日本における経験主義教育の変遷を辿ってみると、結局のところ、経験主義教育が正しく解釈されない限りは、「系統」か「経験」という極端な揺れ動きに逆戻りしてしまう可能性を孕んでいると述べ、「教科」と「領域」の齟齬の原因は経験の扱い方、経験主義教育の解釈にあるのではないかと考察している。

③　保育内容「言葉」と養成校カリキュラムとのつながり

坂本（2006）[9]は、保育者養成カリキュラムにおける保育内容「言葉」の教授内容について、幼稚園教育要領・保育所保育指針にその根拠を求め、養成校で用いられている市販テキストの教材分析などを通して、どのようなシラバスが適切なのかについて考察している。まず、幼稚園教育要領・保育所保育指針における領域「言葉」の位置づけについて考察した上で、保育者養成課程における保育内容「言葉」のシラバスでは、言葉の持つ機能や子どもの言葉の発達を反映しているものでなければならず、子どもの言葉の発達を促すことを可能にする学生の指導力を培うものでなければならない、と論じている。次に、9種類の市販テキストを取り上げ、その内容を分析した結果、養成校で用いられているテキストは必ずしも包括的なものではなく、それぞれ編集者の方針が強く表れているものが多いため、テキストの特徴を生かしつつ必要に応じて教材を補い、授業方法に工夫を加えることの必要性を指摘している。

2）保幼小接続に着目した理論研究

①　領域「言葉」と「国語科」との接続

原田（2016）[10]は、音声言語の発達という視点から、保育園・幼稚園から小学校へという転換期の指導方法について、その実態を明らかにすることを目的として研究を行っている。幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「言葉」と小学校学習指導要領「国語科編」における「話すこと」に関連する部分を抽出してそれぞれの内容を分析

し、そこにどのような系統性があるのかを検討している。その結果、就学前の子どもに求められる力とは、相手に伝わりやすいように話すことではなく、経験を基に自らの思いや感じたことなどを言語として音声化することであると分析している。そして、小学校就学後は、話す技術が細分化され、経験を題材としながら、「事柄の順序」などを考えながら話すことが求められていると述べ、「話す」ことの変化、技術面の変化、「経験」の取り扱いの変化に系統性を見ることができると論じている。

② 発達の連続性と幼小教員の共通理解に向けて

光野（2010）[11]は、幼小が連携した「言葉」に関する指導のあり方を考えるために、幼稚園教育要領の領域「言葉」と小学校学習指導要領「国語科」の中から言語活動と関連する内容を比較し、領域「言葉」が小学校の指導内容の前倒しではないこと、そして、「言葉」の具体的な場面の積み重ねが、小学校教育における抽象的な思考の土台となることを指摘している。そして、活動レベルの連携ではなく、その根本となる発達の連続性というレベルでの連携指導を考えていく必要性について論じている。その具体策として、幼少の教員の共通理解を図るための合同研修向け資料として、同一教材による幼稚園５歳児と小学校１年生（「国語科」）を対象とした指導計画「この音なあに」を作成している。同一教材を用い同じような流れにしたことによって、幼少の言葉の発達の「連続性」と指導内容や方法の「段差」が明らかになり、それぞれの指導のあり方が明確になることをねらったものである。

3）絵本・紙芝居および児童文化財に着目した実践研究

① 養成校における絵本の活用と紙芝居の制作による授業実践

原田（2017）[12]は、養成校においてどのような授業を行うことで基本的な理論を抑え、保育に生きる実践力を養うことができるのかという問題意識のもと、「保育内容（言葉）」の授業でアクティブラーニング化の実践を試みている。その実践で、絵本を活用し紙芝居を制作するという活動を行い、その成果を検討している。まず、「子どもの発達に合わせたことば選び」ということに主眼を置き、対象年齢が明記されている絵本を用いて、どのような言葉が使用されているのかをグループで調べる。その際、文量や挿絵の配色、物語の内容にも着目し、気づきをグループ内で共有する。その後、対象年齢が明記されていない絵本を選択し、前回のグループ活動での調査内容と照合して絵本の対象年齢を推測する。さらに、各グループで対象年齢を決めた上で、絵本を用いた活動の結果を指標として紙芝居を制作する。これら一連の授業実践によって、学生が「言葉」に対して主体的に思考し、また、協同的な学習形態による意見交流を通して紙芝居作品を完成させることで、子どもの言葉についての理解が深まったのではないかと結論付けている。

② 養成校における絵本を紙芝居に作り替える授業実践

神垣・中井（2011）[13]は、絵本を紙芝居に作り替えるという養成校の授業を通して、学生が子どもの「ことば」を育てる視点を理解することができたかどうかを、学生のフィードバックをもとに検討している。その結果、学生が「こどもは絵本にふれることで『ことば』にふれる」ということを意識したうえで紙芝居を制作した場合、学生は最初の段階として作者の意図に気づき、その次の段階として「ことば」と絵の結びつきに気づき、そこから更に考察を深めることによって、保育における「ことば」の指導の視点に気づくという順に学びが深まっていったと考察している。さらに、この活動を通してほとんどの学生が、絵本や紙芝居の構造が子どもの「ことば」の意味の理解を促進したり、「ことば」の使途を広げたりする役割を担っていることに気づくことができており、保育における「ことば」を育てる視点にまで理解を深めることができたと評価している。

③ 保育学生の読み聞かせ絵本の選択傾向

鈴木（2016）[14]は、養成校における授業実践において、学生がそれぞれ絵本を持ち寄りその絵本の読み聞かせを行った後に、最も子どもたちに読ませたい絵本を選択するというルールでビブリオバトルを実施し、学生がどのような絵本に惹かれる傾向があるのかについて分析している。この際、絵本選択のテーマを「いのち」または「どうぶつ」に関連する絵本としている。その結果、最も多くの票を集めた絵本は、小学校の国語教科書にも掲載されている『ずーっとずっとだいすきだよ』であり、他を圧倒して支持を集めたという。そして、多くの票を集めた上位４冊のうち３冊は、いずれも「いのち」から連想される「死」にまつわる感動的な物語という点で共通していることが明らかになった。こうした結果から、学生の絵本選択では、「おとなの側からの発想」により、言語表現を重視した文学的で道徳的な作品に惹かれていく傾向が見られたと指摘している。そして、このように保育における絵本選択で絵本の言語表現に偏重した場合、挿絵や言葉のリズムなど、その絵本の持つ子どもにとっての魅力が見落とされてしまう可能性が生じるとも指摘している。今後養成校において、いかにして学生の絵本選択の幅広い視点を育んでいけるのかという課題が示されている。

④　養成校における保育教材を作成する授業実践

生駒（2014）[15]は、養成校の開講科目「保育内容Ⅱ（言葉）」において、「こどもの言葉を豊かに育む指導の方法を学び、保育環境・保育実践をデザインする力を身に付ける」という到達目標に向け、学生が主体的に学習に向かう仕掛けについて検討している。この方策として、保育教材（著者はこれを、児童文化財と同義として「保育教材（児童文化財）」と表している）の研究と作成などを取り入れた授業実践に取り組んでいる。この実践は、①保育教材の研究、②保育教材の作成、③学修成果の発表と振り返りという流れで行われている。ここで作成される保育教材とは、紙芝居・ペープサート・パネルシアター・人形劇などのシアタースタイルの児童文化財である。多様な言語体験を導く児童文化財との出会いは、子どもの「言葉の体験」となることから、その体験を創出する保育教材の研究と作成に取り組むことは意義があると述べている。こうした一連の授業実践によって、学生の主体的な学びが引き出されたと結論づけている。また、今後の課題として、本科目が、他の教職課程科目との関連性において適切な授業展開となっているのかを改めて検討する必要性についても言及している。

4）領域間連携に着目した実践研究

①　養成校における保育教材の制作による科目間連携授業の実践

鳥居ら（2017）[16]は、保育内容の5領域はそれぞれ独立して存在するものではないという問題意識と、保育者養成教育において保育内容の授業担当教員が科目間連携の必要性を感じていることから、科目間連携授業を試みている。具体的には、鳥居らの所属する養成校の授業科目である「保育内容（言葉）」（領域「言葉」）、「図画工作科基礎」（領域「表現」）、「子どもの食と栄養Ⅰ」（領域「健康」）の担当教員3名が話し合い、3科目連携授業による「食育カルタ」の制作を行っている。授業では、まず「言葉」の教員がカルタの概要を説明、次に「造形」担当教員がカルタの読み札と絵札のデザインや材料についてレクチャー、そして「食育」担当教員が食育媒体の一つとしてのカルタについて、テーマ設定や情報収集の方法と内容を吟味する必要性について解説。その後、グループに分かれてカルタを制作する。こうした3科目連携授業を行うことにより、「言葉」担当教員単独の授業と比較して、①カルタの内容が食育に焦点化され、読み札の内容が科学的根拠のあるものに、②絵札の表現や構図が向上、③客観的な評価の実施、という効果が生まれ、科目連携の意義は大きいと結論づけている。

②　養成校における紙芝居制作による科目間連携授業の実践と課題

神垣ら（2011）[17]は、養成校における授業実践で、領域「言葉」と領域「表現」の造形分野の授業が連携して紙芝居制作を行うことを通して、学生が領域間の関連性や領域をまたいだ総合的視点の重要性について理解することができるかどうかを検討している。具体的には、「言葉」の初回授業で本連携授業の趣旨を説明し、紙芝居の構成を決めた後は、「表現」と「言葉」の授業で交互に紙芝居の制作を行い、最後に「言葉」の授業で発表会を行うというスケジュールで実践している。そして、すべての授業終了後に、一連の連携授業を通してどのような理解が得られたかについて、学生のフィードバックコメントをもとに検討している。その結果、領域「言葉」と領域「表現」が連携して授業を行ったことについての感想では、全体の90％以上のコメントが領域「表現」に関する考察に分類され、一方、領域「言葉」に関する考察に分類されるコメントはなく、領域間の連携に関する考察に分類されたコメントも全体の約5％と非常に少ないことがわかった。また、紙芝居制作全体を通しての感想では、自己の性格や造形的技術についての言及に終始しており、領域間の連携に関する考察はほとんど見られないことが明らかとなっている。これらの結果から、このような実践方法では、領域間の関連性や総合的視点の重要性を学生に伝えることは難しく、それぞれの授業が独立した状態のままになってしまうという難しさを指摘している。こうした課題の克服のためには、各科目担当の教員が、相互の授業役割、紙芝居の定義、連携授業で紙芝居を制作する意義などの共通理解に向けて、より密な話し合いの機会を持つ必要があると述べている。

5）保育学生の子ども理解に着目した実践研究

①　養成校における幼稚園実習中の事例分析による授業実践

並木・井上（2015）[18]は、養成校の「保育内容・言葉」の授業では、学生は言葉の獲得に関する発達の理論を習得するだけではなく、多くの事例に触れて、そこにある子どもの思いを理解しようとする態度を習得することが必要となるという問題意識のもと、学生の実習中の事例を分析することによる幼児理解への学習効果を検証している。具体的には、学生に対し、実習中に子どもが「実習生に自分の気持ちを伝えてきた言葉」、「ごっこ遊び場面での子どもの会話」などの事例を採集するよう教示し、その後の授業でそれらの事例をグループワークで検討している。学生が直接体験した事例を個の学びとしてだけではなく、グループワークを通して他者と共有する実践の試みである。その結果、学生が直接体験した事例につ

いてグループワークによって学びを共有する授業実践には、学ぶことに対する意欲を向上させ、幼児の言葉の発達過程や特徴を具体的に学べる学習効果があったことが示唆されたという。また、同じような実習体験の事例を共有することによって学生同士の意見交換が主体的に行われ、自分とは違う新しい視点を得ることができ、幼児理解や保育者としての関わり方について、修正したり、再構築したりする学習効果があったと述べている。さらに、養成課程の各科目と連携して具体的な事例を共有し、５領域の視点から幼児理解に努めることにより、学生の学びがさらに深まる可能性を示唆している。

6）保育学生の言語表現に着目した調査研究

①　保育学生の言語表現の現状と課題

清道（2013）[19]は、養成校の学生が入学直後の時期に言語表現に関してどのような意識や能力を持っているのか、その現状と課題を明らかにし今後の指導に向けた手がかりを得ることを目的として、学生を対象としたアンケート調査を行っている。その結果、言語表現の中でも、特に「文章を書くこと」と「人前で話すこと」という、保育者の日常的な職務に不可欠な部分に苦手意識を抱いている学生が多いことが明らかになっている。また、基本的な文章作成能力という点でも、表現・表記上の誤りが多く見られたという。こうした苦手意識を減らすためには、まず慣れることが大事であり、授業で書く機会や発表する機会を増やす必要があると述べている。子どもの言語発達を援助することに対する意識については、保育者がすべきこととして「絵本の読み聞かせ」などの様々な活動を挙げることができているものの、何歳児にどのような場面でどのような絵本を読むか、という具体的な援助方法までは想定できていないことがうかがわれるため、授業で補っていく必要性を指摘している。また、保育者がすべきこととして「自分自身の言葉遣いに注意する」ことを挙げた学生が比較的少なかったため、日頃の自分の言葉遣いを意識するよう学生に促していく必要性についても言及している。

Ⅳ．考察

ここまで、保育内容「言葉」に関する先行研究の全体の動向を概観するとともに、主だった研究の内容を見てきた。最後に本章では、これまでの結果から見えてくる保育内容「言葉」に関する先行研究の特質と課題について論じる。

1．保育内容「言葉」に関する先行研究の成果と特質

1）研究数の増加と養成校授業実践研究への注力

保育内容「言葉」に関する研究は、近年増加傾向にあり、とりわけ現行の2008年版幼稚園教育要領・保育所保育指針の期間に発表された研究数の増加と、その研究種類やテーマの多様化が顕著に認められた。加えて、近年においては、保育者養成校における保育学生を対象とした授業実践の開発および検討を行う研究が主流を成していることが明らかとなった。この結果から、保育内容「言葉」に関する研究は、養成校の教育課程における科目と密接に結び付きつつ進められてきていることがわかる。その一方、幼児教育・保育現場をフィールドとした実践研究や子ども、保育者を対象とする研究は少ないことが明らかとなった。このことから、先行研究では、保育内容「言葉」に関する保育実践に直接的に関わるものではなく、その前提となる事柄に間接的に寄与する研究に注力されてきたといえる。

例えば、先述の生野（2010）、福島（2016）のように、幼稚園教育要領・保育所保育指針を指標として幼児教育・保育現場で目指されるべき内容が論じられ、原田（2016）、光野（2010）も幼児教育・保育で目指すべき内容を明確にしつつ、その独自性を担保する実践の方向性を示している。ただし、いずれの論文においても、保育実践現場においてこれらの知見が実際どのように具現化されるのかについては今後の課題とされている。

坂本（2006）による幼稚園教育要領・保育所保育指針の分析から保育者養成カリキュラムの適切な内容を考究する研究や、養成校における授業実践の取り組みについての数々の研究では、養成校の授業実践の充実のための有効な手がかりや知見が提供されている。最も盛んに行われていた絵本・紙芝居に関する研究では、原田（2017）など数々の研究で見られるように、そのほとんどが保育学生を対象としており、彼らの絵本に対する認識や学びについて、つまり、保育学生と絵本・紙芝居の関係に主眼が置かれていたと考えられる。近年着目度が増している領域間連携に関する研究でも、保育現場を射程に入れた研究は極わずかで、その多くは養成校の教育課程における科目間の連携についてであった。そこでは、鳥居ら（2017）、神垣ら（2011）の研究のように、養成校における科目間連携授業の具体的な実践方法やその効果、課題が明らかにされていた。並木・井上（2015）による研究では、保育学生が子ども理解を深めるために有効な授業実践が検討されている。また、保育学生の言語表現に着目した清道（2013）の研究のように、養成校の授業実践で学生の言語表現能力の向上を目指す研究も散見される。

以上のように、養成校の授業実践については、多様な

観点から研究が行われていることが明らかである。養成校の学生がどのような保育内容「言葉」を学んだかということは、将来の保育実践の質に反映されるものであると考えられることから、こうした研究もより良い保育実践に間接的に寄与するものであると言えよう。しかしながら、実際の幼児教育・保育現場における実践にどのような寄与や影響があるのかについては、さらなる検討も必要であると考えられる。

2)「経験」の重視

保育内容「言葉」に関する主だった研究を概観すると、通底して「経験」の重視が見受けられる。生野（2010）や福島（2016）、原田（2016）などは、幼児教育・保育における保育内容「言葉」に関して子どもの「経験」を重視すべき根拠となる理論を提供している。また、本稿で取り上げたいずれの実践研究でも、保育学生の主体的な学びにつながる授業実践の開発に注力されていたことから、学生自身の「経験」のありように重点が置かれていたと考えられる。

そして、実践研究においては、「経験」を生成する媒介として、保育学生の主体的な学びを誘発する教材の開発や活用に注目が寄せられていた。教材として最も盛んに用いられていたのが、絵本や紙芝居を含む児童文化財であった。原田（2017）や神垣・中井（2011）は、絵本を紙芝居に作り替える授業実践を行い、生駒（2014）はシアタースタイルの児童文化財を保育教材として作成する授業実践を行った結果、保育学生の主体的な思考や学びを引き出すことに成功している。加えて、学生自身の言葉の世界の広がり、言葉に対する理解の深まりなど、多様な言語体験を学生が得たことに一定の成果を認めている。鳥居ら（2017）、神垣ら（2011）の研究では、保育教材を作成することによって科目間の連携を試みている。また、並木・井上（2015）は、保育学生自身の経験をもとにした事例の分析による授業実践により、学生の主体的な学びと子ども理解を深める学習効果があることを明らかにしている。保育学生の「経験」を重視し、それを言語化して教材として活用することで、授業の目的にかなう学生の深い学びにつながることを示した研究成果といえる。これらの他に、鈴木（2016）の研究では、養成校の授業実践で絵本を教材とするうえで留意すべきことについての知見も提供されており、教材と保育学生の「経験」との関係を再考する手がかりになると考えられる。

このように、保育内容「言葉」に関する研究では、幼児教育・保育現場における「経験」の重視と、養成校における「経験」の重視という、二つの軸を持ちながら進められていることがうかがえる。

3）保育学生の「言葉」の育成と子どもの「言葉」の育ちの齟齬

これまで述べてきたように、保育内容「言葉」に関する研究では、保育者養成校における授業実践研究に注力されてきた。養成校の教育課程において保育内容「言葉」に関する授業科目は、子どもの言葉の発達について理解するための科目であるが、先行研究を概観すると、これらの授業実践は学生自身の言葉を見つめ直し学び直す機会としても捉えられていることがわかる。保育学生の言語能力の現状と課題に関する清道（2013）の研究はその顕著な例であり、この他にも、学生の言語能力の向上を目的とする実践研究が散見された。また、絵本などの児童文化財を活用した数々の研究でも、学生の「言葉」の育成が目指されていたといえる。

こうした研究を概観すると、保育学生の「言葉」に関する学びと子どもの「言葉」の育ちおよび子どもの「言葉」を豊かに育むための保育実践の間には齟齬があることもうかがえる。例えば、鈴木（2016）の研究では、保育学生の絵本選択は「おとなの側からの発想」によるものになりがちであり、子どものそれとは異なることが指摘されている。保育学生の絵本や「言葉」に対する理解は、子どものそれとは異なるということがわかる。したがって、保育学生を対象とした授業実践では、そうした差異についても考慮する必要があることがうかがえる。保育学生が、絵本や紙芝居、児童文化財の子どもにとっての魅力を理解し、それらを手掛かりに子ども理解を深めていくためには、さらなる検討が必要であろう。保育学生に求められるのは、学生自身の「言葉」の育ちと同時に子どもの「言葉」とその育ちに対する理解であるが、先行研究では、前者については盛んに取り上げられているものの、後者については十分な研究成果の積み重ねがないという現状である。

2. 保育内容「言葉」に関する研究の今後の課題と可能性

以上を踏まえ管見を述べるならば、保育内容「言葉」に関する研究では、保育者養成校における授業実践に主眼を置いた研究成果が中心となっており、子どもの実態を捉え、ボトムアップ的に保育実践を構築していく取り組みを支える研究が不足していると言えるだろう。今後はより一層、子どもに着目し、耳を傾け、子ども特有の「言葉」の世界を少しずつでも明らかにすることに寄与する研究の積み重ねが必要であると考える。そして、保育学生の「言葉」の育成と子どもの「言葉」の育ちのつながりや関係性について検討する研究も待たれる。

保育内容研究では、しばしば、研究者と実践者が連携して保育実践の改善に関わることがある。例えば、保育内容「表現」に関する研究で児嶋ら（2005）[20]は、保育

者、研究者、音楽家による共同研究により、指導計画の検討を通し「実践－反省－実践」の過程を共有することで実践の向上に取り組んでいる。このように、保育者と研究者が相互の視点から実践を解釈したり、保育者の体験を研究者が可視化したりするなど両者が協同することで、一つの視点では接近することのできない事象を描出できると考える。こうしたプロセスを経ることによって、現在手薄となっている保育現場における子どもや保育者を対象とする研究も増えていくのではないだろうか。

今後、保育内容「言葉」に関する研究では、こうした点を視野に入れつつ、子どもと保育者が作り出す園生活の現実と既存の理論や文化、そして保育者養成課程とを、どのようにつなぐかという視点も含めて明らかにしていくことが求められる。

最後に、本稿では限定されたキーワードによる検索の結果抽出された先行研究のみを対象としている。そのため、本研究の方法では漏れてしまった関連する研究も多く存在するであろうことを記しておく。

引用文献

1）森元眞紀子・川上道子（2008）保育内容に関する研究(1)：平成元年版幼稚園教育要領改訂に焦点を当てて．中国学園紀要，7．109-119
2）浜口順子（2014）平成期幼稚園教育要領と保育者の専門性．教育学研究，81(4)．448-459
3）汐見（2008）第４章　日本の幼児教育・保育改革のゆくえ：日本の質・保育を問う知的教育．世界の幼児教育・保育改革と学力．明石書店．pp. 336-359
4）岡本夏木（1982）子どもとことば．岩波新書
5）前掲3）
6）渡辺一弘（2017）領域「人間関係」の指導についての検討：保育者養成校において，他の保育内容の領域との違いを中心に．会津大学短期大学部研究紀要，74．122-135
7）生野金三（2010）領域「言葉」の研究．埼玉学園大学紀要　人間学部篇，10．353-358
8）福島豪（2016)「教科」と「領域」における解釈の齟齬についての試論：デューイの教育思想と保育内容「言葉」を観点として．函館大谷短期大学紀，32．39-46
9）坂本明裕（2016）保育内容（言葉）における教授内容についての一考察：教材分析を基にして．青森明の星短期大学紀要，32，89-97
10）原田大樹（2016）保育内容「言葉」と小学校国語科との接続：保幼小の学びの連続性を目指して．福岡女学院大学紀要　人間関係学部編，17．69-74
11）光野公司郎（2010）小学校第１学年の「国語科」と幼稚園５歳児の領域「言葉」との連携指導の在り方：同一教材「この音なあに」の指導計画作成をとおして．東京未来大学研究紀要，3，67-76
12）原田大樹（2017)「保育内容（言葉)」のアクティブラーニング実践．福岡女学院大学紀要．人間関係学部編，18．39-45,
13）神垣彬子，中井靖（2011）保育者養成における子どもの「ことば」を育てる視点の理解についての研究，川崎医療短期大学紀要，31．69-73
14）鈴木貴史（2016）保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題：保育者養成課程における絵本ビブリオバトルの実践から．帝京科学大学紀要，12．147-153
15）生駒幸子（2014)「保育内容Ⅱ（言葉)」における授業改善の試み：実践型学修プロジェクト「りゅうたん・こどもシアター」を中心に．龍谷教職ジャーナル，2．55-75
16）鳥居美佳子・古屋祥子・山田千明・鳥居美佳子・古屋祥子・山田千明（2017）食育カルタ制作：保育内容複数領域の科目間連携授業の試み．山梨県立大学人間福祉学部紀要，12．68-82
17）神垣彬子・伊藤智里・尾崎公彦（2011）領域「言葉」と領域「表現」の連携授業についての一考察 ― 保育者養成校における科目間の試験的連携．幼年教育研究年，32．95-100
18）並木真理子・井上知香（2015)「保育内容・言葉」の授業における幼稚園実習中の事例分析を用いた学習効果，洗足論叢，43．175-189
19）清道亜都子（2013）保育者養成課程学生における言語表現の現状と課題：「保育内容演習（言葉)」の授業アンケートをもとにして．名古屋女子大学紀要，59（人・社)．315-319
20）児嶋輝美・吉岡妙子・熊谷公博（2005）保育所における音楽表現の計画と実践：発表会への取り組みを通して．徳島文理大学研究紀要，70．37-45